

学位論文題名

モンゴル語の取り立て小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol

－日本語との対照を中心に－

学位論文内容の要旨

1) 本論文の観点と方法

本論文は現代モンゴル語で頻繁に用いられている mini, cini, ni, cü, le, bol という 6 つの小辞を「取り立て」の観点から考察し、同時に日本語において対応／類似する形式との対照分析を試みたものである。取り立ての問題は、どの言語においても、談話や文を分析する際にきわめて重要な問題である。この 6 つの小辞のうち多くは、取り立てと関連して主題を提示する用法があるということが、いくつかの先行研究で指摘されてきた。ただし、これらの小辞を取り立ての観点から、対照言語学的手法を含めて、体系的に扱った研究はこれまで見当たらなかった。

研究の方法として、まずモンゴル語・日本語それぞれの先行研究を検討し、それを踏まえたうえで、モンゴル語に関しては、特に中国・内モンゴルの標準的方言であるチャハル方言を中心に、日常会話や文学作品、さらに内蒙古大学作成の大規模コーパスからデータを収集し、分析対象としている。著者自身がモンゴル語の話者であることの利点を生かしながらも、作例や内省にたよらず、広範囲にデータを求めるとともに、複数の話者に確認することで、データと分析の客観性に配慮している。

本論文は、日本語の取り立てに関する進んだ研究成果を参照し、モンゴル語の分析に生かそうとするものであり、対照言語学の分析手法によって、これまで不十分・不正確にしか捉えられていなかった文法要素の文法的・意味的機能を明らかにしようとするものである。

2) 本論文の内容

本論文は A4 判約 180 ページ（400 字詰め原稿用紙換算約 640 枚）からなり、序章に続く 5 つの章で構成されている。

序章では、研究対象、先行研究の問題点、研究の目的および意義、検証方法、データの収集方法、論文の構成について述べている。

第 1 章「取り立て」では、モンゴル語における取り立ての手段、および先行研究における問題の小辞の位置づけ、また、日本語における取り立てに関する主な先行研究を概観する。モンゴル語では音声的、形態的、統語的にさまざまな手段によって、取り立てが表わされるが、本論文が対象とする一連の小辞もこうした取り立ての観点から位置づけることができる。しかしながら従来の記述ではこの点がきわめて不十分な扱いしか受けて来なか

った。そこで、日本語の取り立て助詞に関する多くの先行研究の成果を、モンゴル語の分析に生かすべく、本章でその概観を行う。

これを受けて、以下の章では対象とする小辞をその特性に応じて 3 つに分け、個別の考察に入る。

第 2 章ではまず mini, cini, ni を取り上げる。これらは本来、人称所属小辞だったものが、取り立ての機能を発達させたものであり、話し手の立場や視点、心的態度という観点からの解釈を試みている。主語、主語以外の文成分、独立成分、格語尾に付く場合等で、これら小辞の置き換えについて検証し、これによりこれらの小辞を取り立ての観点から捉えるのが妥当であることを確認する。人称代名詞との共起に関しては、コーパスから採集した実例に基づき、客観的データを示した。さらに mini, cini, ni が用いられる場合とゼロ接辞(無標形式)で現れる場合の違いを明らかにした。

第 3 章では cū, le を日本語の「も」「だけ」と対照しながら、その類似点と相違点を論じている。この両者が置き換えできる場合とそうでない場合とを比較し、cū, le が日本語の助詞「も」「だけ」に必ずしも対応しないことを述べた。また日本語の助詞「も」「だけ」にはない用法の一つとして、修飾要素と被修飾要素の間に入りこむ用法を考察した。さらに並列または連続の形で現れる cū, le の用法を観察した。これにより、cū, le の共通点や相違点を明らかにした。

第 4 章では bol を取り上げ、上述の ni との対比において、ちょうど日本語の「は」「が」の使い分けと似た点があることに注目し、統語的・情報構造的な観点から分析・考察している。日本語におけるゼロ助詞の形式と「は」「が」の用法を参照しながら、モンゴル語におけるゼロ接辞と bol, ni で現れる形式の違いを考察した。日本語における主題の提示、「象は鼻が長い」式構文、情報構造に関する「は」「が」、対比を表わす「は」、排他を表わす「が」、非難の意味を表わす「が」、疑問詞に付く「は」「が」の用法等について、bol, ni との共通点や相違点を明らかにした。

第 5 章では、全体のまとめとして、これらの小辞を取り立ての観点から捉えるのが妥当であることを再確認している。6 つの小辞の共通点として、先行する要素が似ている点、格語尾と共起できる点、文中ではある程度任意の要素である点、文中に現れる位置と分布が類似している点、先行する要素を取り立て、話し手の主観的判断や心的態度を表わす点などがあげられる。相違点としては、文末の制約があるか否か、述語動詞の間に入り込むことができるか否か、人称か非人称か、また、融合的か排他的かなどの点をまとめている。

そのうえで、今後の課題として、モンゴル語における取り立ての全体像の解明のためには、ここで扱った以外的小辞や副詞的要素にまで考察範囲を拡大する必要があること、また日本語の分析基準を参照・適用するのみならず、モンゴル語独自の基準を見出す必要性について述べている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 曲 敏 郎
副 査 教 授 佐々木 亨
副 査 准教授 加 藤 重 広

学 位 論 文 題 名

モンゴル語の取り立て小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol

－日本語との対照を中心に－

1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 21 年 11 月 30 日 論文提出
平成 21 年 12 月 18 日 審査委員会発足
平成 21 年 12 月 21 日 第 1 回審査委員会：論文配布、審査日程の調整
平成 22 年 1 月 18 日 第 2 回審査委員会：口頭試問の実施
平成 22 年 1 月 18 日 第 3 回審査委員会：試問結果の検討、学位授与の判定
平成 22 年 1 月 25 日 第 4 回審査委員会：審査結果報告書（案）の作成・検討
平成 22 年 1 月 28 日 第 5 回審査委員会：審査結果報告書の確定
平成 22 年 1 月 29 日 審査結果報告書の提出
平成 22 年 2 月 5 日 研究科教授会において審査結果報告
平成 22 年 2 月 22 日 研究科教授会において学位授与承認

2) 審査経過概要

第 2 回審査委員会において、論文提出者から論文内容の概要について説明を受けた後、各審査委員から質疑がなされた。これにより、本論文の主張点がいつそう明確になり、全体として構成・内容とも高い水準にあることが確認された。次いで行われた第 3 回委員会において、学位授与可との判定に至った。ただし若干の軽微な不備が指摘されたが、十分に修正が可能な範囲であるとみて、提出者に改善を求めることとした。その結果、第 4 回審査委員会までに本人から修正箇所が提示され、それを踏まえて主査を中心に審査報告書の原案作成に取りかかった。この原案をもとに、第 5 回委員会において、報告書内容の検討と確認を行った。

3) 本論文の研究成果

審査委員の見解を総合すると、本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

1. モンゴル語研究において、従来、分析・記述が不十分であった文法要素について、「取り立て」の観点から、統語的機能や意味用法を詳細に分析・記述した点。
2. 分析にあたって、日本語学における「取り立て」研究の成果をよく参照し、対照言語学的手法の利点を生かして記述の精度を高めたこと。
3. 母語話者としての直感に頼らず、大規模コーパスの利用や複数のインフォーマントへの確認により、データの客観性に配慮していること。

4) 学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、データの分析と解釈や文章表現に関していくつかの改善すべき点が見出されるとともに、「取り立て」等、基本的な用語や概念の規定に甘さがあること、欧文文献の参照が不十分であること等の問題点も指摘された。しかし細かな誤りは十分修正可能な範囲であり、後者の問題にしても、むしろ今後の発展が十分に期待できる部分であると認められる。全体として本論文は、独自の着眼点と手堅い分析手法で貫かれており、対照研究の実践として高い水準にあると判断される。

こうした点で審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。